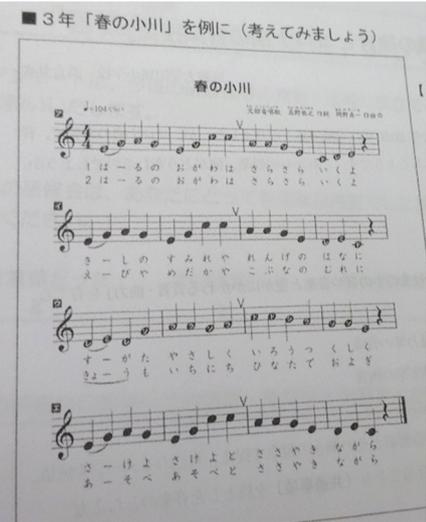


音楽科教育 理論 研修会 終了報告

テーマ	新指導要領の趣旨とコロナ禍の音楽授業	
日時	令和 2年 12月 11日(金)	
会場	千歳市立千歳第二小学校	
講師	筑波大付属小学校 教諭 高倉 弘光 氏	
参加者	会場 10 名(会場)(Zoomで4名)	
研修会 の 様子	<p>新学習指導要領が告示されて3年が経ち、今年、小学校で全面実施となったが、今年度はコロナ禍の影響で、音楽科における授業づくりは変更を余儀なくされ、教育現場では困惑する状況もあった。理論研修会では、新学習指導要領の内容を踏まえ、音楽の授業がどのように変化していくのか学び、コロナ禍の授業に生かす方法について考えた。</p>	
		<p>新学習指導要領における音楽科の改訂のポイントとして、「目標」にある3つの資質能力「知識及び技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」を備えた人間の育成を目指すこととしている。どの領域に関しても、3つの資質能力について考えることになった。</p> <p>ところが、「内容」では「目標」と異なり、「思考力・判断力・表現力」「知識」「技能」の順で明記されている。つまり、音楽科は「技能教科」ではないという意識が必要であり、コロナ禍において、一層このことを意識する必然に迫られた。題材や教材でどのようなことに気づかせ(知識)、どのようなことを考えさせ(思考)、どのような技能を身につけさせたいのか(技能)、あらかじめプランを立てることが重要である、というお話があった。</p>
		<p>3年 「春の小川」を例にして考えてみると、楽譜の1段目には、音符の読み方が書いてある。楽譜の正しい読み方が習得できる楽譜の並びになっており、ドレミが読める、歌える力を身につけることをねらいとしている。(技能)</p> <p>2段目を見ると、読み方が書いていない。音符が反復しており、最後だけ終わりの形になっていることがわかる。楽譜のア、イ、エはほぼ同じ(反復)になっていることに、子どもが自ら気づく力が問われている。</p>

研修会
の
様子



共通教材は、歌い継いでほしいという願いが込められており、何度も歌うことが必要である。その方法として、ドレミを歌いながら音の高さを両手で表現する「ドレミ体操」を紹介され、会場で実践した。「ドレミ体操」とは、両手をまっすぐ前に伸ばして立ち、音の高さに合わせて手の高さも変えて歌う方法である。

主音（ド） 両手を下へ伸ばす。音は最後に主音に戻る。

ソの音は真ん中なので、両手をまっすぐ水平に伸ばす。

ドレミ体操でドから順番に歌う。（先生の後についてやってみる。両手は徐々に上に上がる。）

春の小川を「ドレミ体操」で歌う。

ゲームへと発展させる。（「ドレミ体操」をしながらミしか歌わない。ソやファでも試してみる。）

「春の小川」のドレミ体操では、シが一回しか出てこないことに気づく子が出てくる。（知識）更に、ミだけ歌わないようにするなど、遊びの中から子どもが考え出すようになる。与えられた課題だけでなく、自ら考え出す子どもを育成することが大切である。（学びに向かう力）

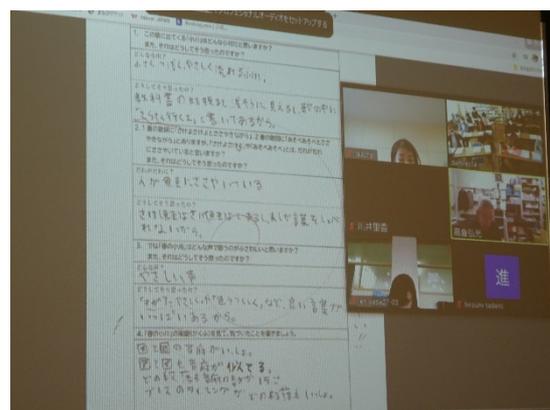


「ドレミ体操」を実践する様子を、ビデオで鑑賞した。（筑波大附属小学校 6月30日）

春の小川をドレミ体操で全員歌う。

ドレミのグループに分かれて、「春の小川」を「ドレミ体操」で歌う。（1人1音だけ担当して歌う）

「ドレミの歌」を「ドレミ体操」をしながら歌う。（二部に分かれるところが、はっきりわかる。）



「春の小川」で身につける思考としては、授業後ワークシートが効果的であった。（実践紹介）

「どんな小川ですか。」との発問に、子ども達は、歌詞や教科書の挿絵をよく見て答え、小川を具体的にイメージしていた。

どのような声で歌うとよいか考えさせるために、「誰が誰に『さけよさけよ』と言っているのか。」との発問があった。そこから、どのように歌ったらよいか考えさせ、ワークシートには「優しい声で歌う。」など書かれていた。

新型コロナウイルスの影響で、急遽会場を千歳第二小学校に変更し、Zoomによるオンライン研修を実施した。会場外で参加された先生方もおり、会場が密にならずに実施することができた。

また、「ドレミ体操」の実践を会場で行うことができ、今後の授業に活用できる内容であった。新学習指導要領に基づいて、音楽の授業はどうあればよいか考えるよい機会になった。Zoomで音と映像のずれはあったが、さほど問題はなかった。今年度は千歳での開催であったが、次年度もこのような形になるのであれば、研修センターでの開催を希望したい。（移動時間の面で負担にならず参加しやすい体制を作ってほしい。）